

上代文学の力

高木市之助

私はよく、上代文学一般の、或いは特に万葉集の美についてきかれたり、書かされたりするが、そんな場合によく感ずることは、この種の文学を美で測ることが、なにかそぐわないように思われることである。これ等の文学は決して美しくないことはないし、もつと言えば、そこには中世や近代の文学の持つ美とはかなりちがつた、特殊の美が感ぜられる。しかしこうした文学が、文学として一番吾々を打つものは果して美のはんちゆうに入られるものであろうか。管見では、それはどうも美よりも力のはんちゆうに入る何物かではなからうか。もちろん美か美でないか、或いはいかに美であるかということ、在来のように精細に考えて行くのを私は拒むのではない。ただ美よりもつと切實に吾々につながるものとして、それが強いが強くないか。どのようにエネルギーギッシュであつて、今日の吾々を鼓舞するかしらないかというような事、つまり力で測ることこそがこの種の文学に対する正攻法であつていいと思うがどんなものであろうか。尤もこの場合力こそが美であつて、その意味ではかゝる美のはんちゆうに入れるべきだと考へることも出来なくはないが、それでは少々論理があそびすぎることになるであらう。